

岩手医科大学歯学会第58回例会抄録

日時：平成16年7月3日（土）午後2時30分より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室

特別講演

コンポジットレジンによる審美修復

寺田林太郎

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

コンポジットレジンとは合成樹脂と無機フィラーの複合材料である。1964年、初めてコンポジットレジンが歯科界に登場して早40年が経過した。この間コンポジットレジン修復は、フィラーおよび表面処理法の改善、歯質接着性レジンの開発、光重合方式の採用等によって材料の諸性質が飛躍的に向上し、急速に臨床に普及した。1980年代にはアマルガム修復にとって代わり、現在では一部メタルインレーの代わりとしても使用される勢いである。

コンポジットレジン修復の最大の特徴は、その優れた歯質接着性にある。そのため、コンポジットレジン修復ではこれまで必要不可欠とされた G. V. Black の提唱する窩洞の形態の概念は不要になった。すなわち窩洞形成に際して、抵抗形態、保持形態の付与および予防拡大が不要になり、齶蝕のみを除去し窩洞形成を終了する修復が可能となった。このように健全歯質をむやみに切削することなく修復を行うことは、最小限歯質削除療法 (Minimal Intervention) として世界的潮流となって推奨されている。

今回の講演ではコンポジットレジンによる審美修復と題して、前歯・臼歯部のコンポジットレジン修復、破折歯の修復および前装冠の前装材料が破損した場合の修理への応用について症例を供覧し、コンポジットレジンを用いた審美修復の一端をお見せした。さらに、材質学的特徴、接着システムの操作の違いとその特性、接着の阻害因子等についてもわれわれのデータも交えて考察した。

歯科医療が20世紀で培った基礎を元に、今世紀さらに発展し、コンポジットレジン修復が患者の QOL (生活の質の向上) のより高度な要求に応えていけるようにして行かねばならない。

一般演題

演題 1. 最近10年間の上顎歯肉扁平上皮癌の治療成績

○島田 俊, 小川 淳, 小原 亜希,
榊田 英之, 中島 崇樹, 山田ちさと,
福田 喜安, 水城 春美

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

目的：最近の上顎歯肉癌の病態と治療成績を把握する目的で、臨床的検討を行った。

対象：1993年から2002年までの10年間に根治的治療を行った上顎歯肉扁平上皮癌一次症例は24例であった。性別では男性10例、女性14例で、年齢は39歳から86歳 (平均68.8±6.7歳) であった。

結果：TN 分類 (1997年, UICC) では T 1-2 が 6 例, T 3-4 が 18 例, N 分類では N 0 が 18 例, N 1 が 4 例, N 2 b が 2 例であった。原発巣を犬歯遠心面で前方型と後方に分類すると、後方が 22 例と大部分を占めていた。治療は 24 例全例に手術が行われ、術前治療後に手術を行ったものが 22 例、手術単独が 2 例で、原発巣の手術法は、部分切除術が 23 例、上顎骨全摘出術が 1 例であった。初診時に頸部転移がみられた症例は 6 例で、このうち 4 例に全頸部郭清術、2 例に上顎部郭清術が行われた。T 分類別原発巣制御率では、T 1, T 3 が 100%, T 2 が 66.7%, T 4 が 86.7% で、全体で 87.5% であった。頸部後発転移は 4 例に認め、一例が遠隔転移死、一例が他病死、2 例が無病生存していた。原疾患非制御 4 例中 3 例で原発巣再発を認め、うち 2 例が原発巣死、1 例が再治療により原発巣と頸部は制御されたが、肺転移をきたし治療中である。疾患特異的 Stage 別 5 年累積生存率は、Stage I + II が 80.0%, Stage III + IV が 94.1%, 全例で 90.6% であった。

結論：担癌生存中の 1 例を含む原疾患非制御 4 例中 3 例が原発巣に再発しており、治療成績の向上には、各種画像診断による進展範囲の把握と原発巣の確実な制御が重要と思われた。